

サンタクロースの国からの【平和のきもち】／山本真記子さん

私は聴覚障害者です。私は2歳になる直前に聴覚障害と診断されました。

私は保育所に入園してまもなく、毎週水曜日のみ、聾学校にも通うことになりました。

片道1時間30分の距離にある聾学校のほか、地元の言語指導教室へ通い、定期聴力検査、発声訓練、言葉の学習指導を受けました。

そのお陰で、私は口話および読唇（話し手の唇の動きを目で見えて読み取ること）が可能になりました。

聾学校への送迎は母と祖父が自営業のお店の都合を合わせながら交代で行ってくれました。

自宅から聾学校を往復する車の中も学びの空間でした。母や祖父とは保育所での出来事や家族の話や、世の中についてなどの話をしました。

また車内でその日に学習した発音訓練や言葉の学習の復習をすることもありました。当時の私は、サ行と「つ」を正確に発声することが苦手でした。

私には3人の姉がいます。最も年が近い姉とも5歳離れています。

姉たちは、母が私ばかりに構っていたことで寂しい思いをしていたに違いありません。

母が私の教育で精一杯だった時期、姉達は学校でいじめを受けていました。母は私の教育で精一杯になっていたため、直ぐには姉たちの実状やこころの異変に気づくことが出来なかったといいます。

その後、私は小学校から地域の普通学校に通いました。私は不可解な行動を繰り返す子どもでした。

当時はまだ聴力が良かったため、先生が説明することを聞き取ることが困難ではありませんでした。

しかし人の話を持續して聞く力がなかった私は教室を突然飛び出し、下駄箱の前に行っ同級生たちの名前をボーッと眺めながらひとりりで遊んでいたこともありました。

母と祖母は私の行動の意味や思考回路が全くわからない、という様子でした。

また、私は他の子どもたちが一般的にはやらないような方法で課題に取り組みずどもでした。

図工の時間にクレヨンで自分の顔を描く時には、肌の部分を肌色ではなく橙色で塗りつぶしていました。

周囲の子どもたちは不思議そうに見ては、「まきこちゃん、なんで顔の色がだいたい色なの？」と尋ねました。先生も「なんで肌色を使わんの？」と尋ねてきました。しかし私はそれらの質問には答えず、ただ黙って取り組んでいました。私には他の子どもとはずれている「何か」がありました。

中学・高校生時代にはクラスメイトたちとの会話に入っていくことが出来ず、私は常に一人で行動していました。また当時は手話も分からず、時々お会いしたほかの聴覚障害者の方々との会話もままなりませんでした。さらに勉強面でも自分が納得できる結果を出せないでおり、人生を悲観する時もありました。

そんなある日、ある一人の聴覚障害者の女性との出会ったことがきっかけで手話を習い始めることになりました。

手話を使い始めると、たちまち人生が変わりました。日々、会話を楽しむことのできる仲間たちと会える。心から笑うことができる。

私はこの時、《今後は積極的に人との繋がりを求め、人脈の輪を広げてゆきたい！》と感じました。

大学では精神保健学を専攻し、現場実習を経て「**一人の人生の重み**」を痛感しました。

そこで自分が中学生の時から心に留めていた「国際支援が出来る人になりたい」という気持ちが現実なものになってきました。

私は27歳の時、身体障害者を対象とした海外派遣事業制度の支援を頂きながら、第33期研修生として、福祉大国であるフィンランドで1年間研修留学することになりました。

中学生の頃から関心を持っていた「国際協力」について、手話を通じて学びたいと思ったのです。

この海外派遣制度を活用できるようにするために、書類選考そして面接試験を経る必要があります。

書類選考は無事に通過しましたが、最終面接では雰囲気^が重苦しく、また面接官の質問内容も厳しいものでした。

私は質問内容に的確に答える事が出来なかったと感じ、不合格を確信していました。

しかし、結果は合格でした。私は周囲の人々に「海外で研修したい」と伝えました。

すると両親や家族、職場の人たちから「仕事はどうするのだ？」、「一人で行くのか？」、「聞こえない君には危ないからダメ!」と、強く反対されました。

《自分のことを応援してほしい》と感じる人ほど、海外研修に挑戦することを許してくれませんでした。

それでも私は夢を諦めたくありませんでした。何度反対されても周囲への説得を続けました。

そのようにして時間ばかりが経過する中でも、研修先との交渉やビザ申請、保険内容の確認や手続きなど、やるべきことがたくさんあり、私は心身ともに疲れ切っていました。

気づけば7ヶ月が経過していました。この7か月間は実に毎日が【闘い】でした。

紆余曲折ありましたが、最終的にはようやく周囲の人々が認め、応援してくれるようになりました。

現地での研修が始まってから2〜3ヶ月の間は現地の手話も全くできず、またフィンランド人はとても内気な性格であるがために、なかなか友達もできませんでした。

私は積極的に人々に話しかけていき、少しずつ現地の手話を覚えていきました。

私がフィンランドで学びたかったことは【国際平和につながる事業について】でした。

一般に知られるNGO団体などの活動とは別で、聴覚障害者連盟の国同士の国際協力です。

世界には、聴覚障害者の社会的権利が無い国が多くあります。

中でもフィンランドはこれらの国々を支援し、「世界ろう連盟」の事務所を構えています。

私はフィンランドの聴覚障害者協会が活動途上国を支援し連携する手順や経緯を調査しました。

フィンランドから支援を受けている国は、アルバニア、ウガンダ、ヨルダン、カボネビアなどです。

これらの国の課題は、障害者の権利が保障されておらず、聴覚障害者たちも自身の国の手話はおるか、自国の言語知識もままならないということでした。

フィンランド側は、支援している国々のろう者たちが自分たちの努力で成長できるよう様子を見ながら支援しています。大切なことは「助ける」ことではなく、「つながらず」「相互協力する」ということでした。

調査を重ねる中で、「支援する」だけでなく、「国同士でお互いに連携し、高め合う」ことが一番大切であるということ学びました。

また研修期間中には、近隣国のスウェーデン、ノルウェー、デンマークを筆頭に、イギリス、イタリア、フランスなどへも足を運び、各国による途上国の聴覚障害者連盟への支援状況と連携方法を取材しました。国際支援にも各国の特色があり、フィンランドの聴覚障害者協会や世界ろう連盟の事業とはまた異なる支援方法をしていることを学びました。

そういった研究を進める中、私自身も「今後は自分が福祉途上国での手話学会を設ける事業に取り組みたい！」と志すようになりました。開発途上国のみならず福祉途上国において、現地の聴覚障害者たちが一堂に集い、手話の学習や障害者の権利について学び、政府や関連機関へ要望を提示していくための事業支援をしたいというイメージが湧いてきたのです。

約1年間の研修留学が終了し、日本へ帰国する時がやってきました。帰国直前には多くの友人たちが送別会に集まってくれました。

その時、いろいろなことが頭の中を駆け巡りました。

合格後の7ヶ月間の説得。当初は友人も少なく寂しかったこと。

途中、研修に行き詰まって自分が何をしたいのか分からなくなってしまったこと。

それでも自分はこの地に降り立つことができ、無事に1年間の研修が終わり、そして今はこんなに多くの素晴らしい友人たちに囲まれている！…と、様々な思いが一気にこみ上げ、涙がぶわっと出てきました。

日本に帰国した直後、1年ぶりに実家へ足を踏み入れた私に、思いがけぬ言葉が待っていました。

あれほど大反対して「行くならば勘当する！」とまで言っていた父が、「結果的には行かせて良かった」と言ってくれたのです。後に母から聞かされ、頑固な父がそのような言葉を言ったということに驚きながらも感動を覚ええました。

― 意志あるところに道は通じる。 ―

そのことを強く実感した瞬間でした。

その後まもなく、私をこの事業の研修生として選出してくださいました先生の訃報が入りました。

先生は肢体麻痺の方で、同事業の第2期研修生でもありません。

先生は私がフィンランドへ渡航する直前、励みになるメッセージをくださいました。

そんな先生が、留学を諦めるべきかと悩んでいた私にくださった心に残る言葉があります。

【可能性を広げる生き方をしてください。】

今の挑戦や努力は、未来の自分へのプレゼントになる。私はそれを実感しています。

研修終了後、留学前と比較して交友関係ががらっと変わりました。

ヨーロッパやアメリカ、アジアから日本を旅行する各国の聴覚障害者の方々から連絡を頻繁に受け、京都観光や食事案内をする機会が一気に増えました。

国際手話で会話を進めながら諸国の情勢、聴覚障害者たちの生活そして福祉制度、また今後の理想的な動向についての情報交換をしています。

そして私は今、イギリスの大学院で国際平和学・国際開発学を専攻する目標に向けての準備に取り組んでいる最中です。第二の留学が実現した暁には、平和学を多

様な視点から考察し、「開発途上国の聴覚障害者の権利擁護そしてコミュニケーション方法の確立」に向けた取り組みの実現へ向けて学びを深めたいと志しています。

これまでの出会いや学んだ事を大切に、自分の経験を周囲の人々にお伝えしていく姿勢を続けること。

それが、サンタクコースが住む国フィンランドから帰還した私からの皆さんに対するプレゼントとなれば良いと思います。